

# 非常ベルを止める手立ではあるか!?

## 各地のボウリング場も苦境に

全国各地のボウリング場もまた、団体客の予約キャンセルやリーグ戦の自粛などが相次いで苦境に立たされている。

「感染拡大が収束しても、一度離れたお客さんがすぐに戻ってくるわけではないですからね。騒動が長びけば、閉鎖に追い込まれるセンターも出てくるのでは?」と、前出の東海林支配人も先行きを不安視する。

現状、何より避けたいのは、世間に「ボウリング場は感染リスクの高いキケンな遊技場」と

いう先入観を持たれてしまうことだろう。それを完全に払しょくする有効な手立ではないが、衛生面で出来る限りの対策を講じ、感染者を出さないようにする取り組みは必須だ。

ちなみに東京ポートボウルでは、コンコースのボールラックの上にクリーニングステーションを設置し、ハウスボールを利用する前のフィンガーホール除菌を推奨していた。

日場協の中里会長も「過敏になりすぎず、できる対策をし

かりやるしかない」と言う。

「私のセンター(相模原パークレーンズ)では、全従業員のマスク着用や、お客さまにハイタッチではなく、実際に手を触れないエアタッチを呼びかけたりしています。また、今はアルコール消毒液が手に入りにくい状況なので、日場協で、昨年新設のトーナメント『JPBA☆SSSカップ』をスポンサーいただいた全卸連(全国化粧品日用品卸連合会)の森友徳兵衛会長にお願いをして分けていただくことになり、希望するセンターに購入してもらっていま

す」

こうした取り組みが全国のセンターに広がり、業界を挙げて「安全宣言」が出せるような環境を一日でも早く整えたいところだ。

☆

新型コロナウイルス禍は今、スポーツ界や興行ビジネス界のみならず、ありとあらゆるジャンルをむしばみ、人々の経済生活をも危うくしている。

厚生労働省が発表した3月3日7時現在の国内感染者数は274(死亡者数6)。結果的に感染拡大の温床となったクルーズ

船「プリンセス・エリザベス号」内の感染者を加えれば979(同12)に達する。中国や韓国と比べて圧倒的に少ないのは被験者数の違いによるもので、実際にはケタ違いの「無自覚感染者」が各地に潜んでいると推察されている。

まさに、かつてない異常事態だ。この「見えない敵」との戦いに勝利し、サバイバルを果たすには相当な覚悟と「胆力」が必要。次号ではJPBAの谷口健会長らに話を聞き、「非常ベルを止める」方策の有無を探ってみたいと思う。



▲東京ポートボウルに設置されているハウスボール・クリーニングステーション



▲相模原パークレーンズでは全スタッフがマスクを着用。名和秋プロもマスク姿で「エアタッチ」(HPより)

特別編

## Dr. 塚田の健康コラム

正しい対応で新型コロナの感染流行を最小限に…

ちょっと役立つ



**塚田芳久** 昭和54年新潟大学医学部卒業。平成17年から新潟県立十日町病院長。平成28年から新潟県立新発田病院長。平成15年から新潟県ボウリング連盟会長。平成20年4月からJBC理事。日本協公認スポーツドクター。JOC医・科学強化スタッフ。

新型コロナウイルス感染症が、このところの最大関心事になっています。流行を乗り越えるため、知識を整理し対策を立てましょう。

インフルエンザウイルス以外に、たくさんの種類の“かぜ”ウイルスがあります。コロナウイルスは“SARS”や“MARS”のような特殊なもの以外に、4種類の“かぜ”ウイルスとして知られ、かぜの1割から2割を占めています。

ウイルスは遺伝子だけの存在で、動物などの細胞に入り込まないと毒性発揮も増殖もできません。増殖活性のあるウイルス(遺伝子)が、人の口や鼻や眼の粘膜などに付着し、さらに体内

に入ってきてはじめて感染という状態になります。

感染しても、ウイルス増殖より免疫力が高く、抗体産生が上回ると、症状は出ずに治ってしまう不顕性感染となります。抗体が上回るためには、ワクチン接種で準備するか、抗ウイルス剤によって増殖を抑える対策が有効です。ところが“新型”となれば、感染の経験がなく、ワクチン予防も抗ウイルス剤の準備もなく、発病を許す確率が高くなり、流行となります。

これまでインフルエンザウイルスも大流行があり、人類は明治23年のロシアかぜ、大正7年のスペインかぜ、昭和32年のアジアかぜ、昭和43年の香

港かぜなどを経験しています。最近では予防接種や抗インフルエ

ンザ薬の開発で、大きな流行は抑制されてきました。

今回の新型コロナウイルスには、ワクチンや抗ウイルス薬の準備がないので、飛沫感染や接触感染を防ぐ日常対策が最も有効です。ウイルスが飛沫に乗って広がらないように、症状のある人はマスクをつけて、咳エチケットを守って下さい。人の集まる会合での拡散を防ぐには、お互いの距離を開けて座り、

時々部屋の換気をして下さい。

接触機会を減らすためには、会合への参加を見送り、手で握る表面平滑な手すりやつり革の消毒、タオルやキーボードなどの共用を避け、消毒した機材の個別使用やディスポ(使い捨て)製品使用を心がけましょう。

それでも流行期や家族間では、ウイルス接触は避けられないものです。そのような場面では、手で顔(口、鼻、眼など)を触らない、手についたとしても20秒以上かけて丁寧に洗い流すことで、感染機会が避けられます。

流行(パンデミック)を封じ込めるには、人から人への感染を抑制することが最も大切です。人から人への感染は、ワクチンや抗ウイルス薬がなくても、感染予防策を大勢の皆さんが同時に遂行することで可能となります。感染予防にご協力いただくとともに、万一感染しても軽症ですむためには、栄養や休養を十分取り、生活習慣病をコントロールし、日ごろから健康管理を心がけておきましょう。

